

地域レクリエーションに関する研究

—— 長崎県高島町におけるスポーツ活動の現状と問題点 ——

福岡教育大学 秋吉 嘉 範

I 研究の目的

現在の石炭産業は企業、それ自体の将来の見通しや、労働力の問題など数多くの問題をかかえこみ、年々斜陽化の傾向にある。

この高島町もそれにもれず、過去何回かの閉山の危機をのりこえてきたのである。そのうえ、離島であるという不利な条件、たとえば周囲4 kmの小島のなかに人口16000人が高層アパートにひしめくような状態で生活している。端島にいたっては、いっそうひどく周囲約400 mのなかに2800人が生活している状態である。そのため、島にはレクリエーションに供する空間が少ないので、町民のレクリエーションに関する興味、関心度は都市部にくらべ低く、また実践活動も少ないようである。

そこで、本研究は地域レクリエーションの振興をはかる一環として、長崎県高島町に住む町民のスポーツ活動の実態を把握することによって、その問題点を指摘し、今後のスポーツ活動の在り方について検討しようとしたものである。

II 研究の方法

(1) 対象

本研究は、長崎県高島町に住む成年男女910名を対象に、同町教育委員会を通じて調査を依頼し、その結果、730名の回収を得たものである。回収率は80.2%である。そのなかで集計不能を除き、集計したのは666名、集計率91.2%である。集計分析の角度は性別、職業別に行なったものである。

(2) 方法

方法は質問紙法および面接法、資料分析による。集計は性別、職業別に行ない、実数を百分率であらわしている。なお、今回は性別を中心に報告する。

(3) 時期

昭和46年9月から10月までである。

III 高島町の概要

(1) 地勢および沿革

高島町は長崎市から海上約14.45 kmに位置し、東は野母崎町、三和町に、北は香焼町、伊王島に隣接している。東の野母崎町に4.5 km、北の香焼町へ6.4 kmの距離にある。県庁所在地長崎市へ約60分、香焼町へ約45分、端島へ約20分まで到着できる。人口18464名（高島15606名、端島2858名 昭和46年7月現在）で、面積1.24 km²（高島1.13 km²、端島0.1 km²）、また、高島は北海道とやや似ており、地形は四角形で中央に海拔118 mの権現山がそびえ立っている。

昭和23年1月町制を施行（県下30番目）、人口8948人、戸数1797戸の町として新発足し、その後、昭和30年4月に隣地の高浜村端島と合併し、今日に至っている。また、この島における農林漁業は、漁業がわずか0.2%をしめている程度で、その主たるものは石炭産業であり、第二次産業の占める割合は83%にもなっている。

(2) 人口構成および変化

まず年度別人口をみると、45年度の約3000人強の激減が目立つ。これは、この年端島が閉山の危機にみまわれたことが、その大きな原因になっている。また、43年を頂点にして減少傾向を

示していることも注目される。

月別人口移動は、とくにきわだった変化はみられないが、端島において1月の2979人から7月の2858人と、わずか半年の間に121人の減少がみられる。これは、端島における石炭産業の不況をあらわしていると考えられる。一般的に、表1、表2とも炭坑町のもつ不安定な人口動態の特質を如実に示しているといえよう。

年令別人口では、男女とも20代が極めて少ない(男子657名、女子848名)。これは、高島町が石炭産業を基盤とした一町一企業という特殊な町であるため、青年層の勤務場所が少ないためや、炭鉱不況のなかにある高島町の将来に不安を感じ、また魅力をなくして県外に出るものと考えられる。主な流出先としては、福岡、東京、大阪などがあげられる。

(3) 産 業

職業別人口分布は、男女とも鉱業がトップ(男子4275名、女子449名)、ついで男子は建設(276名)・サービス(230名)、女子はサービス(421名)・卸売小売(413名)の順である。

① 鉱 業

高島町における産業は、歴史的な背景をもつ石炭を中心に発展したものである。この町の炭鉱は、わが国最高級の原料炭産出鉱であり、その操業は古く三菱鉱業株式会社の手に移って、すでに80余年を経過している。昭和44年10月、同社から、石炭部門を独立、二子坑、端島坑、鯉田坑(福岡)の三坑を統括し、三菱高島炭坑株式会社として新発足し、現在に至っている。

② 商 業

高島町における商業は、基幹産業の鉱業と相まって、しだいに栄え、現在の中央市場を母体とする商店街と、蛸瀬、山手地区の副商店街に成長したのである。さらに、事業所や住宅団地の進出もあって購売力は伸び、総商店数は昭和36年の114店から44年には162店、販売額も10億944万円から18億6500万円と約2倍に

増加している。商工会を中心にした経営方針の研究と顧客サービスの向上に努力している。しかし、離島という不利な立場にあって人口の割りには、顧客吸収率が悪いこと、さらに長崎市より20～50%の物価高で、とくに最近、対岸の野母半島における生鮮食料品の減少により、長崎市よりの供給増加が目立っているなど生活面では必ずしも楽でなく、今後の発展に問題が残されている。

(4) これからの高島町

石炭産業を基盤としたこの高島町は、一町一企業という特殊な町であるため、炭坑の閉山、縮小と数多くの問題に突きあたっている。過去何回か閉山ムードは従業員を動揺させ、若手従業員を中心とする離職者を大量に出している。そのために各方面において従業員不足という深刻な事態を引き起している。しかし、これまでの石炭斜陽化ムードがたたって簡単に従業員が集まらず、その対策に苦しんでいるのが現状である。

つぎに、現在炭鉱で働いている従業員はどうであろう。炭鉱の合理化は機械化、自動化をもたらしたが、機械の出現は従業員の従来からの作業内容を大巾に変えている。すなわち、仕事の内容が肉体労働中心の作業から、精神的緊張を要求する作業へと変ってきたことである。その結果、疲労が増大するという現象が目立ってきている。しかしながら、労働時間は余り短縮されず、労働密度が増大する傾向にあり、福利厚生面の配慮も十分でなく、むしろ福利厚生費はほとんどの炭鉱で削減の方向にあるといわれる。このことも離職者を生む原因の一つになっているようである。

従って、基幹産業の基礎となる労働力の確保は企業、または町の存立に重大要因があり、高島町のビジョンはこの観点に立って確立されなければならぬと考えられる。

表1はスポーツクラブの内容、表2は文化クラブの内容を明らかにしたものである。スポーツ、文化の両クラブとも名目的には充実しているが、実質的には低調である。

表 1. 高島町のスポーツクラブの内容

サークル名	登録 非登録	設立年月日	構成人員	指導員数	利用施設	活動状況	経費
高島スポーツ少年団	登録	昭和 37. 4. 1	870	男子 71	町内各施設	年間常時	580000円
端島 "	"	"	220	男子 26	"	"	180000円
高島体協陸上部	"	38. 7.10	65	男子 1	"	"	58000円
" ソフトボール	"	"	100	男子 2	"	"	650000円
" 剣道	"	"	68	男子 4	武道場	"	59000円
" 卓球	"	"	85	男子 2	体育館	"	30000円
" 庭球	"	"	39	男子 2	会社コート	"	49000円
" バレーボール	"	"	180	男子 7	体育館	"	350000円
" 柔道	"	"	75	男子 5	武道場	"	65000円
" 野球	"	"	45	男子 3	学校グラウンド	"	46000円
" 山岳	"	"	120	男子 3	町外施設	夏 季	310000円
" バトミントン	"	"	30	男子 1	体育館	年間常時	36000円

表 2. 高島町の文化クラブの内容

サークル名	登録 非登録	設立年月日	構成人員	指導員数	利用施設	活動状況	経費
高島かるた会	非登録	昭和 31. 1.15	30	男子 3	集会所	毎月例会	10000円
端島かるた会	"	23. 6.10	240	男子 3	公民館	毎月例会 子供例会は毎週 毎週1回練習会	30000円
高島民ようクラブ	"	38. 1.20	30	女子 1	緑ヶ丘集会所	敬老会に発表	35000円
端島 "	"	26.10.10	50	女子 1	公民館	"	35000円
高島短歌会	"	23. 1.10	30	男子 2	個人宅又は 光町集会所	毎月例会 経費不足、詩集発行できず	10000円
高島景謡会	"	31. 6.20	64	男子 1	三菱炭 職員クラブ	毎月例会	25000円
端島観世会	"	30. 2.10	50	男子 1	"	"	20000円
高島婦人学級洋裁部	登録	43. 4. 1	150	女子 2	講座室	毎週 2 回	150000円
" 和裁部	"	"	80	女子 1	"	毎週 1 回	80000円
" 手芸部	"	"	60	女子 1	"	"	" 円
" 生花部	"	"	25	女子 1	"	"	50000円
" 料理部	"	"	90	女子 2	"	"	" 円
高島緑ヶ丘生花クラブ	非登録	28. 6.10	35	女子 1	緑ヶ丘集会所	"	18000円
光町生花クラブ	"	36. 1.15	48	女子 2	光町集会所	"	21000円
高島あけぼの婦人会 生花クラブ	登録	38. 4.10	30	女子 2	本町老人クラブ	"	30000円
あけぼの婦人会 和裁クラブ	"	"	30	女子 2	"	"	" 円
" 手芸クラブ	"	"	20	女子 2	"	"	15000円

IV 結果と考察

(1) 町民の生活とその意識

1日の労働時間は、男子の場合、8時間～10時間に集約される(58.5%)。また、炭坑従業員は残業が通常となっているようで11時間(7.6%)や12時間以上(5.5%)がかなりいることがわかる。すなわち、労働時間は決して短くない。

女子の場合、8時間が最も多いが(23.0%)、10時間以上もかなりいる(37.1%)。つまり全般的に巾広い時間帯になっている。しかしながら5時間以下という短いのは5.0%と少ない。また、12時間以上働いている長時間労働が、17.6%いることは注目される。

さて表3で余暇時間をみると、平日では男女とも2～4時間に集中しているが、休日になると、男子は8～10時間が大巾に多くなっている。ところが女子は平日にくらべて、1時間程度多くなったくらいで、大差がない。ということは、休日といえども家事や雑事、育児などのため余暇時間を十分にとれないことを示すものである。

表3. 余暇時間(%)

	平日		休日	
	男子	女子	男子	女子
1時間以下	5.3	6.4	1.5	3.6
2時間	20.3	27.1	2.7	12.1
3時間	24.9	17.1	5.7	12.1
4時間	20.9	20.7	6.5	10.7
5時間	12.2	10.7	9.1	19.4
6時間	6.1	5.7	8.6	15.0
7時間	0.8	5.0	4.2	5.7
8時間	2.5	0.7	17.7	5.0
9時間	0.6	0	2.3	2.1
10時間以上	2.8	0.7	33.7	3.6
無記不明	3.5	5.9	8.0	10.7

図1. 余暇時間の過ごし方

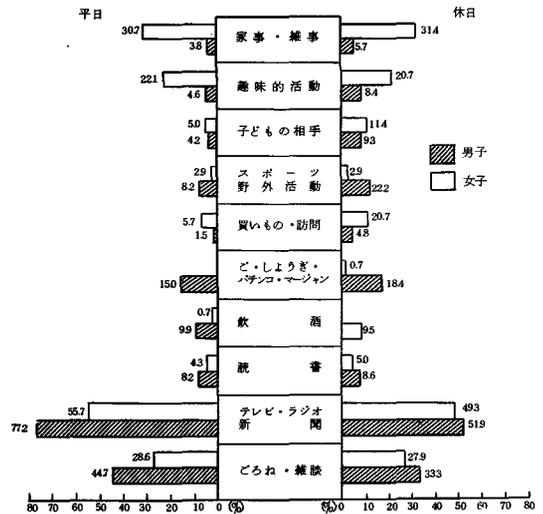


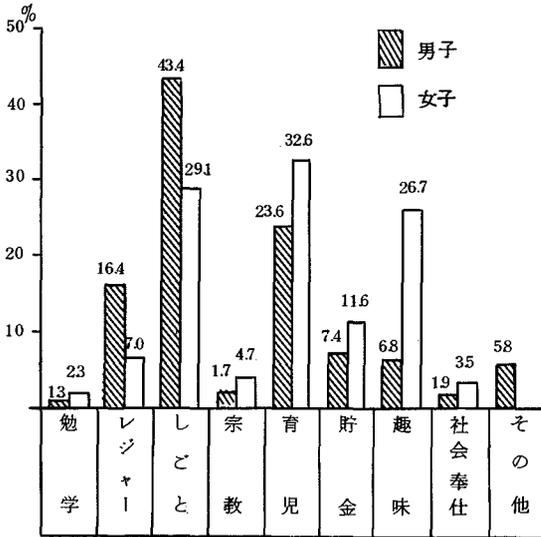
図1で余暇時間の過ごし方をみると、平日、休日とも、テレビ、ラジオ、新聞が男女とも断然多い。ついで、男子はごろね、雑談、女子は家事、雑事である。男子が目立つのは、平日で、碁、しょうぎ、パチンコ、マーじゃん、休日で、スポーツ、野外活動、女子が目立つのは、趣味の活動(平日、休日とも)、子どもの相手(休日)である。男女ともレクリエーションな活動といえればスポーツと趣味の活動が少々みられるだけで、あとの大半は、消極的休養と子どもの相手などの半拘束的なものである。

このような状況のなかで、毎日の生活の疲労度はどうであろうか。男子の場合、「非常につかれる」は12.9%、「かなりつかれる」64.8%と極めて多い。このことは労働時間が長いことと関連していると推察される。すなわち、長時間労働のために疲労が蓄積されているのであろう。女子の場合、「非常につかれる」は11.4%、「かなり疲れる」47.9%で男子よりもやや少ないが、それでも一般的に疲労度は高いといえよう。このような疲労状況にあるのなら何らかの対策を立てねばならないと考える。

ところで「生きがいをかんじる」と答えたものは、男子59.1%(かんじない者11.6%)、女子61.4%

(かんじない者10.7%)と、やや女子の方が多。その内容を図2でみると、男子は、しごとが43.4%でトップ、ついで育児23.6%、レジャー16.4%の順である。女子は、育児が32.6%と最も多く、ついでしごと29.1%、趣味26.7%の順である。このようにしごとや育児は人間として存在するためにぜひとも必要なものであると考えられる。一方、レジャーや趣味、社会奉仕などのレクリエーションに関するものが生きがいとして考えられてきているのは町民の生活意識を知るうえで注目される。

図2. 生きがいの内容



さて、町民がこの町に住みたいか、住みたくないかを調べた結果によれば、「この町に住みたい」は男女とも27~33%程度であり、「住みたくない」は男子25.4%、女子39.0%と割合に多い。「わからない」を含めると町民はこの町にいつまでも住む気持ではないようである。すなわち、町民の町への定着度は低いといえるであろう。

以上、町民の生活とその意識をみてきたが、離島という悪条件、過密人口、物価高による住みにくさ、長時間労働、炭鉱の閉山ムードなどが影響してか、町を離れたいという気持が強い傾向にある。このような条件からみると、毎日の生活を送

るのが精一杯で、町民はレクリエーションどころではないという状況である。

(2) 町民のスポーツ活動について

ところで「毎日の生活において運動不足を強く感じる」、「いくらを感じる」と答えたものは、男子50.4%、女子59.4%であった。すなわち、男女とも2人に1人が運動不足を感じている。また、女子の場合に、「むしろ身体を動かすすぎる」というものが26.4%とかなり多い。このことは、家事や雑事、また育事などの時間が多いことから考えられる。男女とも運動不足を解消させる方法を考える必要がある。そのためにはスポーツをどのようにして生活にくり入れて行くか考えるべきである。

スポーツに対する好き嫌いをみると、「スポーツをするのが好き」と答えたものが男子46.6%、女子45.0%である。全体的に半数にも満たない。今後は、「どちらでもない」と答えたものの意識(男子41.8%、女子40.0%)を好きという意識にまで高めることが、スポーツ振興の大きな課題になるのではないと思われる。

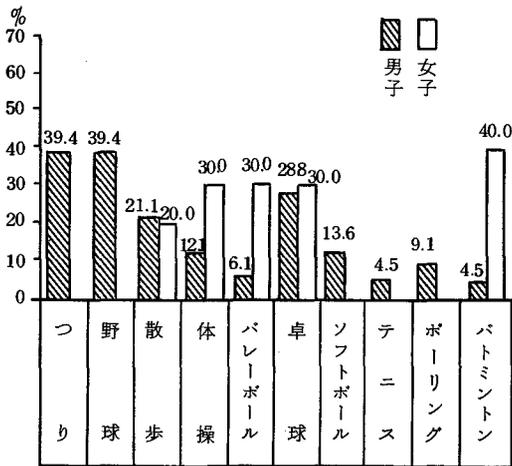
好きなスポーツ種目はおよそ次の通りである。男子の場合、つり(5.02%)、野球(29.4%)、ボーリング(29.0%)、散歩(23.3%)、体操およびソフトボール(11.0%)と答えたものが多い。女子の場合は、ボーリング(42.9%)、体操(30.2%)、散歩(22.3%)、バレーボール(17.5%)、バドミントン(11.1%)の順になっている。とくに、男女とも注目されるのは、ボーリングである。しかし、高島町にはまだボーリング場は開設されていないので、テレビ、雑誌などから視覚的にとらえたものが大部分であるとも考えられる。また体操、散歩は用具も何もいらないので、身体活動面から考えると最も手軽なスポーツであるといえよう。

スポーツ活動の実施程度は、男子の場合「月1回」「週1回」、「週2~3回」している人が28.5%で、スポーツが好きだと答えた46.6%(前述)にくらべて18.1%も少ない。女子の場合

合も同様で「好き」と答えた45.8%に比べて、27.9%も少ない。これは、スポーツをするのが好きでも、実際にはやれない人が男女とも、かなり多くいることがわかる。また、スポーツを「ほとんどしない」ものが、男子は10人中7人、女子は10人中8人いることも注目される。すなわち、運動不足を訴えながらもスポーツなどの運動をしている人達があまりにも少ないことである。「ほとんどスポーツをしない」人の理由として、男女とも「時間がない」が40.7%（男子）、51.0%（女子）で圧倒的に多い。ついで「身体の具合が悪い」「運動がへた」となっている。「運動がへた」という理由は学校教育の問題でもあるが、手軽にできるスポーツ指導を考えるべきである。とくに女子の場合楽しい条件をつくる指導が必要である。

スポーツの実施内容（活動）は、男子の場合、つり39.4%、野球39.4%、卓球28.8%、散歩21.2%の順である。女子はバトミントン40.0%、体操30.0%、卓球30.0%、バレーボール30.0%の順である。男女ともボーリングの実施内容が少ないのは、前にも述べたように、高島町はまだボーリング場が開設されていないため、やりたくてもやれないスポーツとしてボーリングがあげられているのであろう。（図3参照）。

図3. スポーツ活動の実施内容



注 2項目以上選択なので100%をこす

スポーツ活動の相手は、男子が、同じ職場の人と52.0%、家族と46.0%、ひとりで29.0%の順になっている。女子の場合、家族と70.6%、主婦のグループと29.4%、ひとりで23.5%となっている。

今後は好きなもの同志のグループ活動や家族単位で行なえるスポーツ活動など個人よりもグループ単位でやれるものが望ましい。

スポーツ活動の場所をみると男子は、海44.0%と多いが、これは、ほとんどが、つりと推察される。女子の場合は、自分のうちが35.3%と多く、屋外で行なうことが少ない。また、高島町においては学校開放が認められているので、グループやクラブをつくって、日曜、祭日など大いに活用することが望まれる。そのためには、町教育委員会や体育協会また、体育指導委員などによる企画・運営指導がぜひ欲しい。

(3) スポーツ施設について

高島町のすべてのスポーツ施設について過去一年間（昭和45年10月～昭和46年9月）の利用状況を調べた結果、次の通りであった。すなわち男子で47.7%、女子で65.0%の人が一度も利用していない。いいかえれば、男子の場合は10人中5人、女子の場合10人中6人強の人が、この1年間に一度もこのようなスポーツ施設を利用していないということがわかる。スポーツをしていないのでスポーツ施設を利用していないのは当然である。つまり町民のかぎられた一部の人達のスポーツ活動に終わっていることである。仕事に追われてスポーツどころではないというのが現状である。しかし疲労回復や労働力再生産という立場からレクリエーションとしてのスポーツ活動の必要性を考えるべきである。そのための具体的施策を町や体育協会などの関連団体で検討する必要がある。

つぎに、表4でその数少ない利用者の状況を見てみると、男子は、西海岸グラウンド64.7%、高島小学校グラウンド36.7%、女子が、高島小学校グラウンド49.0%、高島小学校体育館42.9%、高

表 4. 利用状況の内容(%)

場所	性別	
	男子	女子
高島小グラウンド	36.7	49.0
高島中グラウンド	16.0	38.8
高島高グラウンド	3.3	4.1
西海岸グラウンド	64.7	14.3
高島小体育館	11.3	42.9
高島中体育館	4.0	28.6
高島高体育館	1.8	4.1
高島小プール	3.6	4.1
小島公園プール	14.5	12.2
緑ヶ丘プール	4.4	2.0
小島公園	12.7	22.4
権現山公園	12.7	18.4
光町テニスコート	2.5	0
卓球場	1.1	6.1
武道場	2.2	2.0
弓道場	1.8	0

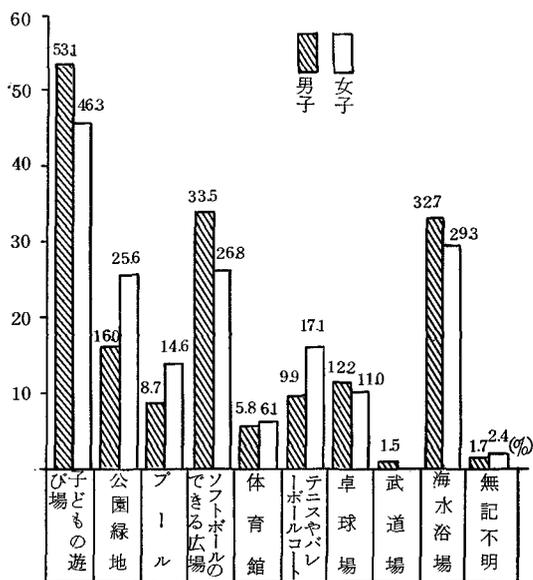
(注) 2項目以上選択なので100%をこす。

スポーツ施設がもっと必要と思うか」の問いに対して、「もっと必要」と答えたものが、男子65.2%、女子58.7%となっている。また、必要と思うものの内容をみると、子供の遊び場が男子53.1%、女子46.3%、野球場が男子33.5%、女子26.8%、海水浴場が男子32.7%、女子29.3%となっている(図4)。このことから推察されるのは、男女とも施設の内容が子供中心になっているということである。もう少し、大人の立場にたった要求、大人にも利用できるものも要求してほしいように思われる。また、ここで注目されるのは、海水浴場である。高島町は島でありながら、島の大半の海岸線は崖で囲まれているため、海水浴場には不利な点が多く、町民は対岸の高浜や黒浜に行っている現状である。そのためには小島公園プールの利用を積極的に進めて欲しい。このほか、島という地域性から公園、緑地などの散歩やハイキングコースにそこがれをもっていて、その必要性を感

島中学校グラウンド38.8%が主なものとしてあげられる。なお、昭和45年度に開設された小島公園プールの利用者が男女とも、10%台で極めて少ない。また、卓球場・武道場・弓道場にいたっては、実在することを知らないものが多くいるようである。その点、町当局のPR不足が指摘されるであろう。

ところで、「ス

図 4. 必要とするスポーツ施設の内容



(注) 2項目以上選択なので100%をこす

じていることもうかがわれる。狭いながらも山があり、簡単なハイキングコースはできると思われる。また、遊び場としての緑地づくりをぜひ押進めて欲しい。

(4) 町や職場のスポーツ行事について

昭和45年10月から昭和46年9月までに、町や職場のスポーツ行事に参加したことがあるものは、男子29.1%、女子19.3%であった。女子は男子に比べ10%ほど少ない。さらに参加後の満足度をみると、「再びそのような計画があれば参加したいか」という問いに、「ぜひ参加したい」と答えたものが、男子77.1%、女子77.8%と極めて多い。ということは、参加したものは、またぜひ参加したいという考えを持っていることがわかる。となれば、なお一層行事やクラブ活動に参加するよう働きかけることが必要である。元来、スポーツは得手、不得手にかかわらず参加してはじめて、その楽しさを味わうことができるのである。そこで、受動的、かつ消極的な態度から進んで参加するという意識変革のための教育または指導やPRが必要である。とくに高島町は、地域的不利性はまぬがれぬが、スポーツによって住みよい町づくりをはかるのも一方法である。そのため

には町民が気軽に、しかも楽しく参加できるような計画をたて、数多くの機会を用意することが、大いに必要となってくる。スポーツ行事不参加者でも、参加したいという希望がある（男子22.3%、女子23.5%）ことから、もっと積極的に働きかけることによって、スポーツ人口をふやせると考えられる。わからないと答えた人も男子33.8%、女子33.3%いる。

(5) 町へのスポーツ活動に対する要望や意見

最後に町民の町へのスポーツ活動に対する要望や意見を主なものだけあげてみよう。

① もっと積極的に町主催の野球大会、ソフトボール大会、テニス、卓球大会を開催して欲しい。

② 町民全員が参加できるような、年齢別水泳大会を開催してもらいたい。

③ 町主催のスポーツ大会が少ない。若い人達のためにも、色々のスポーツ大会が必要である。

④ 高校生ぐらいの年頃の事件が時々起る。もっと彼等に明るいスポーツの場を与えて欲しい。

⑤ 大衆の参加できる種目、初歩からでもできる気軽な種目を計画すること。

⑥ スポーツ活動を行なう場合、いろいろの制限を設けることは、たとえ好きであっても、参加の妨げになる。広くみんなが参加できるように計画すること。

⑦ 青少年不良化防止のため、スポーツ施設について十分な配慮をお願いしたい。また、成人の趣味の面からも考慮して欲しい。

⑧ 町のクラブに入っていないと、スポーツをやりたくてもなかなかその機会がないので、地区とか職場とかのスポーツ大会を町が積極的に応援していただかなければ、一般のものは気軽にスポーツを楽しむことができない。

⑨ スポーツクラブに入っている人々を対象にばかり、大会を計画してもわれわれには無意味としか思わない。

⑩ どのようなスポーツ活動が町で行なわれているのか、まったく私達にはわからない。もっ

と積極的なPRを望む。

⑪ 一部の人達だけのスポーツも結構だが、高年令層にもできるものを考えて欲しい。

⑫ 一年に春秋2回位の町主催のスポーツ大会をやってもらいたい。スポーツをしたい人誰もが気軽に参加できるような種目であること。選手など特定の人のためのスポーツなら必要ない。

⑬ 高島町には体育協会があるが、勝つための行事が中心となっている。誰でも参加できる大会が少ない。みんなが楽しくスポーツをやる大会を計画して欲しい。

⑭ バレーボール一種目に力を入れている感じがする。もっと色々の種目をやって欲しい。

⑮ 周辺が海だから、便利な所で安心して泳げるような海水浴場と、できるなら子供が島の淋しさを忘れるためにボーリング場の開設を希望する。

⑯ 主婦が昼間、時間を作って誰でも入れられるような卓球場が欲しい。また、そのための設備、用具が欲しい。

⑰ 気軽に施設や用具を貸与してもらいたい。また、何時でもスポーツができるように、設備や用具についての、PRが欲しい。

⑱ 労働者の町であり、特に坑内労働者が多数で、その点からも非常に運動不足と思う。

町立の体育館を設立して、室内でできるスポーツの設備とともに、誰でも自由に使用出来る方法で開放して欲しい。

⑲ 小中学校の夏、冬、春休み期間などに体育館を開放して、球技などの講習をすべきである。高島町の特殊性、ことに、小さな広場で多くの町民ができるスポーツを町自身の主催でやるべきである。礦業所中心のスポーツの催しには反対。全町民のためのスポーツであるべきである。

⑳ 各学校の運動場の使用許可を緩和させて欲しい。

㉑ 家庭の主婦を対象にした健康維持のためのスポーツ体操教室のような、誰でも気軽に参加できるものがあればよいと思う。（週に1～2回

程度)

㊟ とかく中高年者はスポーツは他人がするもの、自分は見るものと思いがちである。年令に関係なく誰でも参加できるような計画を立てて欲しい。

以上である。

V 要 約

(1) 町民の生活とその意識

1日の労働時間は男子で8～10時間、女子で8時間が最も多い。ところが、男子は残業、女子は家事や雑事などで11～12時間働いているのがかなりみられる。このような長時間労働が反映してか、男女とも毎日の生活で疲れているものが大半を占める。ところで、余暇時間をみると、男女とも平日で2～4時間、休日になると、男子は8～10時間と大巾に多くなるが、女子は平日よりやや多くなる程度である。余暇時間の内容は男女とも、テレビ、ラジオ、新聞が、平日、休日を問わず断然多い。ついで、男子は、ごろね、雑談、女子は家事や雑事、わずかに目立つのは、男子で休日のスポーツ、女子は趣味的活動である。全般的に男女とも、平日と休日とでは活動内容に大差なく、消極的休養や半拘束的内容の活動が多い。

ついで、生きがいを見ると、男女とも60%前後が感じている。その内容は男子で、しごと、ついで育児、レジャーの順、女子は育児がトップ、ついで、しごと、趣味の順である。また、町への定着度は男女とも町に住みたくないのが $\frac{1}{3}$ 、いつまでも住むというのが $\frac{1}{3}$ である。他はわからないといっている。

(2) スポーツ活動について

毎日の生活で運動不足を感じるものは男女とも約50%である。ところがスポーツの好き嫌いをみると、男女とも50%弱がスポーツをするのが好きと答えている。すきなスポーツ活動の内容をみると、男子はつりがトップ、ついで野球、ボーリング、体操の順、女子はボーリング、体操、散歩、バレーボール、卓球の順である。さて、ス

ポーツ活動の実施程度をみると、男女とも70%前後がほとんどしない。実際活動しているのは10%程度と考えられる。その内容をみると、男子はつり、野球、卓球、散歩の順、女子は体操、バレーボール、卓球の順である。

以上をふりかえると、毎日の生活で運動不足を訴えるものが多いこと、また、運動やスポーツ好きが多いのに、実際活動の場面になると極めて少ないという現象が起きていることである。それは町民がスポーツ活動を必要としているのか、もし、必要としていても実施上問題が色々あって出来ないのか、その点を明らかにすることが問題解決の糸口になると思われる。

(3) スポーツ施設について

スポーツ活動が少ないことは換言すれば、スポーツ施設の利用状況が少ないことを表わす。この調査から過去1年間の施設利用状況をみると、男子は50%、女子は35%程度である。利用状況の内容は、男女とも高島小学校、高島中学校に集中している。また、男子は西海岸グラウンドを多く利用している。これらの施設について、もっと必要というのが男女とも60%前後、その内容は子ども遊び場がトップ、ついでソフトボールのできる広場、海水浴場の順である。ところでスポーツ施設が少ないかという点必ずしもそうではない。むしろ、スポーツ施設を有効に利用する方法を知らないのではないか、その点、町当局のPR不足があげられる。

(4) スポーツ行事について

町のスポーツ行事と企業の行事を含めて考えると、行事数は決して少なくない。ところが、実際参加したのは男子30%、女子20%である。しかしながら、一度参加したら、またぜひ参加したいというものがかなりいることである。また、参加したことの無いものでも、参加したいという希望を持っているものが23%程度いることである。このためには、行事そのものを知ってもらい、参加できるような働きかけが不足しているといえそうである。

(5) 町へのスポーツ活動に対する要望や意見
町民の町当局に対する意見としては、大まかに分けるとつぎの5つになる。

① 町主催のスポーツ計画の増加，それに伴う積極的なPR。

② 不良化防止策におけるスポーツ活動の推進

③ スポーツ行事が，特定の人だけの種目に終始していることに対する不満

④ 年令に適応したスポーツ計画と指導

⑤ 施設の充実

以上が主なる意見であるが，町主催の行事が少ない，また，気軽にできるスポーツ活動が少ないの2点が圧倒的に多かったようである。また，年代別によるプログラム，家族ぐるみで参加できるプログラムを設けて欲しいという意見も多い。このような要望や意見については解決できるものから早く手掛けてやるという姿勢を町のスポーツ行政にぜひ望みたい。

この研究をふりかえると，いくつかの問題点が考えられる。まず第一に，町民が生活に追われ，疲れ果て，炭鉱閉山ムードのなかで浮足立っていることである。この町で永住はしない，いずれ他の町へ去って行くという状況では文化は育たない。また，レクリエーション問題を考えるゆとりがない。それが無関心層を生み出す要因ともなっている。

このような状況であればある程，高島町の明るい町づくり，健康づくりが必要である。暗いムードをふきとばすような文化活動，スポーツ活動がなお一層必要である。われわれの研究はその資料提供として意味があったと考える。

最後にこの調査にご協力いただいた高島町の町民の皆さん，及び町教育委員会に厚く感謝の意を表す，なお，この研究は住田司（北九州市明治学園）との共同研究であることを付記する。